

乳腺腫瘍科

○乳腺腫瘍科の概要

1. 診療科の特徴

近年増加している「がん」のなかで、乳がんは代表的な疾患です。罹患率では女性のがんの第1位になったため、医学会のみならず大きな社会問題になりつつあります。最近のデータでは11人に1人が乳がんにかかるといわれています。そんな疾患を診療する乳腺腫瘍科は大きな重責を担っている科であり、これからの伸びが期待できる“promising な科”です。

埼玉医科大学乳腺腫瘍科は、平成16年7月に新設された診療科です。乳腺腫瘍科という診療科のネーミングからは外科系に属するのかわかりにくいかもしれませんが、外科系に属しています。診療内容としては外科的手技を身につける以外に、診断面では画像診断の読影技術や、病理学的知識の習得が必要で、治療面では内分泌療法、化学療法および緩和医療に至るまで幅広い知識を身につけることが可能で今求められている全人的医療を実践できる科です。また、女性患者がほとんどであり“見た目”を整えるという形成外科的要素も含んでおり、外科のなかでは最も繊細な診療科とも言えます。

初期臨床研修で身につけるべき内容は、基本的な外科手技の習得、乳がんの画像診断技術の習得、薬物療法（化学療法、内分泌療法、分子標的薬剤による治療）の知識の習得、インフォームドコンセントや緩和医療を含めたがん患者に対する診の全般的知識を身につけ、多職種とのコミュニケーションをとるチーム医療の中の医師の役割を知ることがあげられます。

興味があれば研究のことも垣間見ることが可能です。研究面では、全てのがん腫のなかで最も進んでいる疾患領域のひとつです。その背景には、乳がんは薬物療法がとてもよく効き、検体の採取も容易であることから治療や研究の成果が反映されやすく、比較的速く結果が得られるということがあります。近年流行の分子生物学的研究も最も進んでおり、国際医療センターでは最先端の研究を担うゲノムセンターも隣接しており、トランスレーショナルリサーチの成果を上げるにはまたとない環境です。

2. 研修責任者と指導者

病院長・研修責任者	佐伯 俊昭 (教授)*	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
診療部長・教育主任	大崎 昭彦 (教授)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	石黒 洋 (教授)	米国腫瘍内科専門医、がん薬物療法専門医・指導医
	長谷部孝弘 (教授)	日本病理学会専門医
病棟医長/外来医長	松浦 一生 (教授)*	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	大原 正裕 (准教授)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
スタッフ医師	横川 秀樹 (講師)	日本形成外科学会専門医
	島田 浩子 (講師)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	浅野 彩 (講師)**	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	貫井 麻未 (助教)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	藤本 章博 (助教)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	一瀬 友希 (助教)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	黒澤 多英子 (助教)	
	中目 絢子 (助教)	
	榊原 彩花 (助教)	認定遺伝カウンセラー、家族性腫瘍カウンセラー
	猪鼻 和歌子 (専攻医)	
	三上 恵美 (専攻医)	
	藤内 伸子 (非常勤)	日本外科学会外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医
	廣川 詠子 (非常勤)	日本形成外科学会専門医、日本乳癌学会乳腺専門医

*兼任、**埼玉医科大学病院常勤医

3. 診療科実績

埼玉医科大学病院における乳腺腫瘍科の2019年の診療実績は、乳癌の診断がメインであるが、乳癌検診の精密検査機

関として重要な役割を果たしており、国際医療センターと連携することで乳癌の診断と治療がスムーズに行えている。

＊連携病院・既研修病院

連携病院：丸山記念総合病院、佐々木記念病院、豊岡第一病院、東松山医師会病院、三井病院、シャローム病院、間柴
医院、岡村記念クリニック、たかだクリニックなど

スタッフの既研修病院：広島大学病院、埼玉医科大学病院、防衛医科大学校病院、国立がんセンター東病院、四国がん
センター、九州がんセンターなど

スタッフの既留学先：米国がん研究所（NCI/NIH）、カリフォルニア大学アーバイン校、スローン・ケタリン記念がんセ
ンター、ダナ・ファーマーがん研究所、ハワイ大学、センメルワイズ大学、ハンガリー国立がんセンター、ペーチ大
学など

4. 研修方法

研修方略 (LS: Learning Strategies)

大学病院は診断がメインであるため外来における画像診断、針生検などの診断手技の習得を行う。治療面は国際医療
センターにて病棟はスタッフ医師が指導医として直接に指導にあたる。スタッフ医師と共に担当医（主治医）となる
が、担当医以外の患者についてもチームの一員としてケアを行い、実際の臨床経験を積む。

国際医療センターにおいて毎週月曜日午後 4 時 00 分および水・金曜日午前 8 時 00 分から術前カンファレンスが定期
的に行われ、次週の手術症例について検討する。また毎週の水曜日午後 6 時より乳癌治療方針カンファレンスが行わ
れ、術後薬物療法や放射線療法の決定や、再発・進行乳癌の治療方針について議論され、毎月第 3 週の水曜日午後 6 時
よりの臨床・病理合同カンファレンスでは術後の病理診断の詳細な検討が行われ術前の画像診断との対比や治療方針に
関わる病理所見についての討論がなされる。これらのカンファレンスに出席し討論に参加する。

上記の経験すべき疾患について受け持ち患者のレポートを提出する。手術症例につき、その診断、治療法、手術法な
どについてレポートを提出する。

- 1 病棟主治医として入院患者の病歴を把握する。
- 2 診断と治療の方針をまとめ入院診療計画書を作成する。
- 3 各種のカンファレンスで診断と治療の方針を説明する。
- 4 院内の研修医対象ミニレクチャーに参加する。
- 5 医局で開催される症例検討会で症例提示する。
- 6 日本乳癌学会の診療ガイドラインの該当箇所を参照する。
- 7 診断結果から治療方針を説明する。
- 8 術後リハビリテーションの意義に従い実施を指示する。
- 9 診断のために行う針生検の助手を経験する。
- 10 日本乳癌学会地方会で症例報告を行う。

研修評価法 (EV: Evaluation)

修了時に研修担当指導医による評価を受ける。EPOC2 評価項目の他、各行動目標の達成度につき、本人および評
価者と確認する。

経験すべき疾患についてのレポート、手術症例についてレポートを参考に評価する。

- A (研修目標を優秀な成績で達成できた)
- B (研修目標を達成できた)
- C (研修目標を達成できなかった)

※C 評価の場合には研修管理委員会で再検討し、選択科目期間に再度、必須事項の研修を考慮する。

5. 経験目標・到達目標

一般目標 (GIO)

乳癌の正確な診断に必要な検査法の意義・適応を理解したうえで、画像の読影能力、外科的診断手技を習得し、乳
癌患者の治療方針の立て方、術前検査、周術期管理、外科的的基本的手技を身につける。

行動目標 (SBOs)

以下は既に基本研修で掲げた目標は省略し、当診療科に比較的特有と考えられる目標を示した。

- 1) 入院診療

- ・患者・家族や医療スタッフとの信頼関係を築きチーム医療を実践できる。
- ・上級医師の指導のもと患者への必要な指示および処置ができる。
- ・症例呈示ができ、チーム医療のメンバーと討論できる。
- ・診療計画を作成できる
- ・診療ガイドラインやクリニカルパスを理解し、活用できる。
- ・インフォームドコンセントの基本を理解できる。
- ・手術記録が適切に記載できる。
- ・手術標本を正しく取り扱うことができる。
- ・術前に必要な検査を選択でき、オーダーできる。
- ・手術に伴う危険因子を理解できる。
- ・適切な輸液管理ができる
- ・術後合併症に対する適切な処置と治療法を理解し、実践できる。
- ・創傷処置が適切にできる。
- ・術後の疼痛管理ができる。2) 外科的技術
- ・滅菌・無菌・消毒の概念を正しく理解できる。
- ・ガウンテクニック、手洗い、術野の消毒などの清潔操作が正しくできる。
- ・局所麻酔法ができ、皮膚の縫合法を理解し、実践できる。
- ・創傷治癒過程を正しく理解し、創傷の管理ができる。3) 経験すべき疾患
- ・乳癌、乳腺症、線維腺腫、葉状腫瘍、乳腺炎、女性化乳房、乳管内乳頭腫

6. その他

3年目以降の技術習得スケジュール

いわゆる後期臨床研修プログラムに乗っ取ったコースとしては2通りある。直接乳腺腫瘍科の大学院に進むか、外科後期研修プログラムに進み、外科の各科をローテーションするなかで乳腺腫瘍科をまわる。前者は学位を取得しつつ乳腺専門医を取得する最短コースを想定したもので、後者は外科専門医を最短で取得することを想定したコースである。

週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土
8:00		助教回診	カンファレンス	助教回診	カンファレンス	助教回診
8:30~	講師回診/手術	外来/病棟	手術	外来/病棟	手術	
14:00		病棟	検査(マンモトーム針生検)	検査(マンモトーム針生検)	手術	
15:00	術前カンファレンス 教授回診					
18:00 (毎週)	回診	回診	乳がん治療方針 カンファレンス	回診	回診	
18:00 (第3週)	回診	回診	臨床・病理合同 カンファレンス	回診	回診	

指導医からの一言

一見、所帯は小さくアットホームな雰囲気ですが、乳がんはがんの中でも罹患率が高く、疾患としての専門性も高いため、当科の外来診療患者数は国際医療センターの全外来患者数の約10%を占めます。多忙ではありますが、みなさんの希望に応えられる“場”とスタッフは揃っています。診療面でも、研究面でも多くのpotentialを秘めた科でもあります。世界を視野に入れた最高の診療ができる場をわれわれと一緒に築いてくれる若い力をお待ちしています。